

relax library

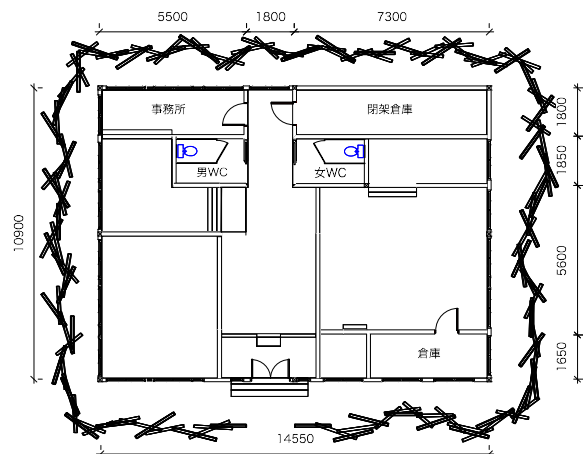
Concept

本を借り、座って静かに読書するという図書館の概念を少し変え、くつろぐことが一番の目的とする図書館を作った。

図書館の持つ堅苦しいイメージをなくし、寝ながら本を読むでもよし、一人の空間を作りたい人でもよし、そんな自由で決まりのない包まれる空間の図書館を提案する。



Plan view

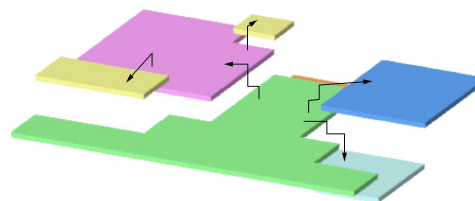


平面図 1:100

奥の方に事務所と閉架倉庫を配置する。
木の板で組み立てたモニュメントの入り口は外部からの視線のストレスを与えないために、ソファと向かい合わないように、さらにモニュメント同士が重ならないように配置を工夫した。
プライベート空間を楽しみたい人、リクライニングソファでくつろぎたい人、友達と会話を楽しみたい人など様々な楽しみ方で高さが異なるフロアで過ごすことができる。

Diagram

図書館全体でスキップフロアを利用する。高さが違うフロアごとに色付けをした。フロアの高さを変え、くつろいでいる人への視線を感じさせないように工夫した。空間を壁で仕切らず、フロアの高さの違いで区切ることで開放感を感じさせつつ、プライベート空間を楽しめる。



※地上からの高さ	
200mm	1250mm
500mm	2500mm
800mm	17000mm

Point

【木で包まれるプライベート空間】
一人が収まるサイズで組まれた木の板の中には背もたれ付きのソファがあり、一人のプライベート空間を楽しめる。
密閉はせず、少し光が入ってくるような木の組み立てで、外部の視線を気にせず、かつ柔らかな光が入る空間になっている。



【ストレスを感じない図書館】

中の図書館を囲むように数種類に染まった木の板が配置されている。これにより外壁に多くの窓を配置していても、外部からの視線を感じない。さらに、図書館全体を木で包み込むことで温かく落ち着いた雰囲気を出している。

木と学ぶ ～ウッドスタディーハウス～



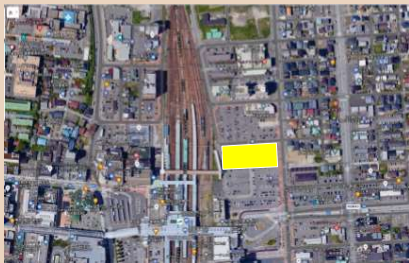
Background

学校施設における木材利用は、子供たちのストレスを緩和させ、授業での集中力が増す効果がある。木材は他にも血圧を低下させたり、インフルエンザや怪我の抑制効果などといった身体的にも良い影響がある一方で、リラックスできるなどの心理的な効果もある。

また、秋田市は図書館以外に勉強するスペースがあまりなく、特に高校生のテスト期間は駅のあらゆる多目的スペースが混雑する。私自身も高校生の時、テスト期間に友人と教えあひながら勉強するスペースがなく、困った経験がある。これらの背景から、学校や塾とは異なる、勉強やリモートワークのための施設での木材利用を提案する。

Location

秋田駅東口の屋外駐車場のスペースに設置する。秋田駅周辺はアクセスが良く、特に高校生は電車やバスよりするために毎日駅を訪れる人が多いことに着目し、電車やバスの待ち時間に気軽に立ち寄れる点を考慮した。そして、この土地は海から離れており、津波が押し寄せるとは考えにくい。近くに土砂崩れが起こるような山もなく、安定している。そのため、緊急時には避難場所としても提供できる。そのような点を踏まえて、東口にも人の流れを作ることに加え、緊急時には役立つ、誰にも利用しやすいこの位置に配置したいと考えた。



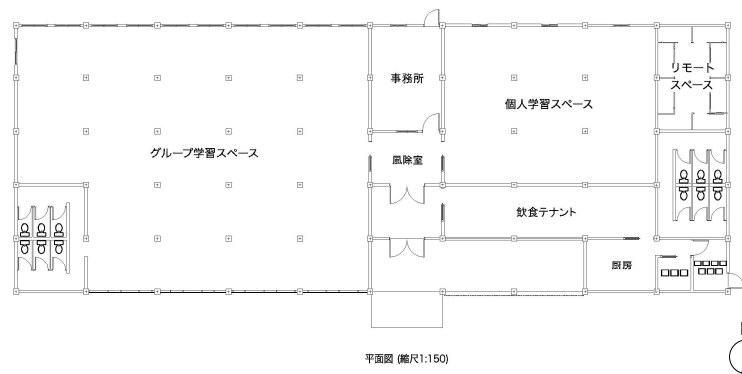
引用：Google map

Concept

このウッドスタディーハウスは、自宅では集中して学習できない、友達と教え合って学習したい、でも秋田には場所が限られている...という若者に向けた勉強するスペースの提案である。木の香りや明るさ、温かさに包まれながら学習することで、木が人間にもたらす身体的効果、心理的效果も期待できる。

秋田県の木材利用は近年多くの場所で見られ、能代市立二ツ井小学校の校舎は木造で建てられるなど、教育施設でも利用されてきている。また、秋田駅も秋田県の顔として木質化が進み、秋田らしい駅へと生まれ変わっている。このウッドスタディーハウスは、これからの社会を担う若者に木材の効果を利用した勉強に励む施設を提供することで、若者が暮らしやすい街づくりの一環として秋田県に活気を持たせたい。

Floor Plan



Advantage

木材を利用することの利点は非常に多く、次のような点が挙げられる。

- ・木の香りはストレスを和らげ、心も体もリラックスでき、教育的効果としても期待できる。
- ・木材は、湿度が高くなると水分を吸収し、低くなると水分を放出して室内の湿度を一定に保つ。
- ・木は視覚的にも感覚的にも他の材料と比べて柔らかで温かみのある材料であり、足にかかる負担も少なく、空間全体に明るい印象を与える。
- ・木材は再生産可能な生物材料であるため、永久に生産し続けることができ、地球温暖化の原因となっているCO2の排出を抑える。
- ・インフルエンザの蔓延が抑制される傾向がみられる。



木材を利用すること・学習における効果・地球環境
 ウッドスタディーハウスはこの3点が組み合わせられている。
 未来を担う若者・未来を考えた作り方は
 木材を利用するからこそできることである。

Space Proposal

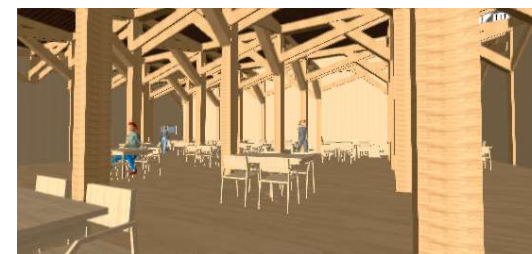
学習環境が人によって異なる観点に着目し、3つのスペースを提案する。

①個人学習スペース



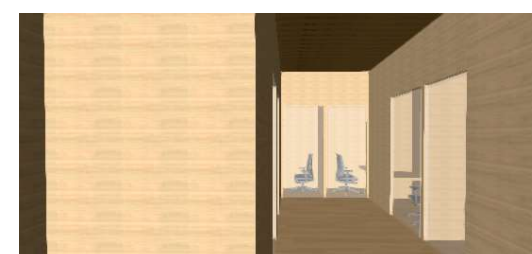
1人で静かに勉強したい人のためのスペース。1席1席にパーテーションを設けることによって周囲が視界から遮断され、集中しやすい環境が整っている。

②グループ学習スペース



みんなで教え合って勉強できるスペース。テーブルと椅子をよせれば広い空間となるため、規模が小さいイベントや試験会場などにも利用できる。

③リモートスペース



リモートワークを行う場所。一つ一つのブースが個室になっているため周囲を気にせずに仕事ができる。ドアに使われているガラスは、代々木深町小公園の透明トイレと同じシステムを利用し、利用者がいないときは透明で、利用者がブースに入ると曇りガラスになるようになっている。

テナントスペース



テナントは外からも中の様子がわかるようにガラスを用い、外を楽しめるようテラス席も設置した。



複合施設



コンテナ型仮設住宅

離合集散 | 秋田県における移動式木造建築の提案

新型コロナウイルスの感染拡大から1年以上が経過した今日では、人が集まることに抵抗を感じるようになった。しかし一方で、友達、親戚、地域の人との交流がなくなることへの抵抗も同時に感じることも多い。これからの時代どのように変化していくかわからない状態の中で、建築空間の変化も問われるようになった。そこで、形を変えることが従来より容易にできる建築物があってもいいのではないかと考えた。建物が集まった時、分散したりすることができ、それに合わせて人も移動するだろう。また、近年毎年のように大きな被害をもたらす自然災害、新しい生活様式と復興のための新たな手段を同時に模索する。秋田県には未だ事例がない、移動式コンテナ型の木造建築を提案する。

複合施設



交流スペース



本屋



カフェ

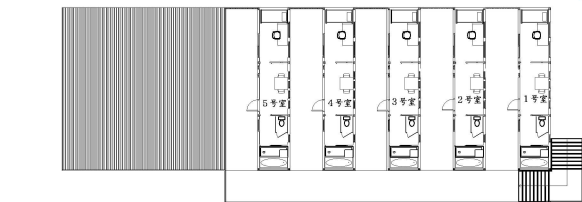
今後、生活様式がどのように変化していくか予測はできないからこそ、今日の建築の形として、従来のように人が集まれる空間、密になることを回避するような分散した空間のどちらにもなれるような複合施設とする。複数のユニットを組み合わせて、大きな空間を作り出し、人々が以前のように交流できるような空間を作ったり、1つの空間ごとを切り離し小さい空間を作ることでもできる。

今後、以前のように人々が集まることに抵抗がなくなった時には、花屋や物産店、仮設体育館など、この複合施設を中心に様々な移動式コンテナ型木造建築が増えていくことを期待する。

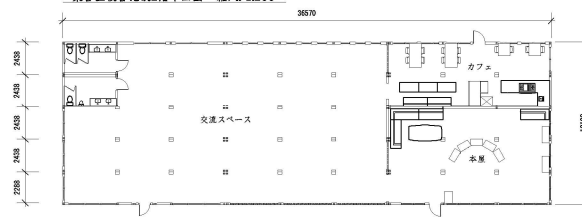
交流スペースは市民の方々が自由に会議やレクリエーション等に使用できる。ここで木工教室を開いて、交流スペースで使用できる机や椅子、本屋の本棚等を製作し、複合施設で木材に対する興味・関心、知識を広げていく。

『みんなで作る本屋』は、地域の人たちがそれぞれいなくなった本を持ち寄り、販売する古本屋とする。本棚は木工教室で作られたものを使用し、家具にも木材を多く利用するようにする。本屋内には、ソファを置き気軽に訪れて本を鑑んだりすることが出来る空間を目指す。

2階建にすることもでき、2階は簡易宿泊施設とする。これにより、遠方から来客に立ち寄ることも可能となり、木の温もりを感じて落ち着くような場所とする。



集合型複合施設2階平面図 縮尺: 1:200



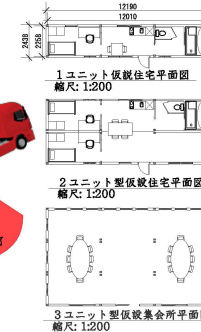
集合型複合施設1階平面図 縮尺: 1:200



仕組み

トラックでの輸送可能な国際規格の40フィートの大きさを1ユニットとする。これをクレーンで吊り上げたり、陸・海のどちらでも輸送可能とする。また、ユニットは連結・分解させることができ、積み上げることができるようにする。通常は複数のユニットを組み合わせて作った、市民の交流の場となるような複合施設として機能する。2つのユニットで構成されたカフェ、3つのユニットで構成された本屋、そして、10のユニットで構成された交流スペースとして使用し、建物内で木材に触れられる機会を設けられるような空間とする。そして、自然災害が起こり、避難生活を余儀なくされた時は、県内外問わず必要な場所に移動して仮設住宅となる。社会的備蓄となる移動式木造コンテナ型仮設住宅は、新たな災害復興の手助けとなる。

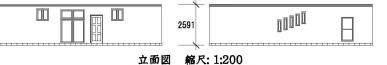
災害仮設住宅



長い避難生活が続くと心身ともに悪影響を受けることがわかっていて、また、近年は新型コロナウイルス等の感染症対策として、3密の回避が挙げられている。これは、避難所での生活においても適応させるだろう。よって、従来の体育館や公民館などので大空間に大勢の人数が生活をおくる避難所は、換気や社会的距離のことも踏まえて健康のことを考えると、適切とは言えない。そのため、今まではより早期に仮設住宅等のプライバシーや社会的距離を保つ住居が必要となるが、災害が発生して、避難所生活が開始してから始まるのでは時間を要してしまう。そこで、既に形が出来上がっていて、トラックや貨物船等で移動できるコンテナ型の仮設建築があれば、基礎を作り、電気や水道を運ばずに生活を始めることができる。

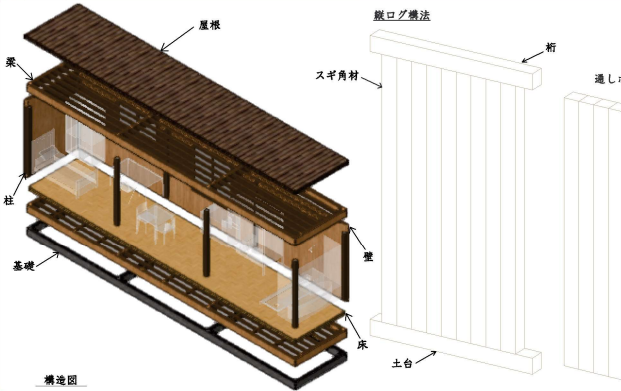
仮設住宅の必要がなくなれば、解体せず、元の場所に戻り地域の人の交流の場となり、新たな複合施設などとして生まれ変わったりすることができる。これにより、資源の無駄を減らすことに期待する。

1ユニットだけで作られる仮設住宅では、1~2人を想定した大きさのものとなる。また、仮設住宅でも2つや3つのユニットを組み合わせて家族向けのものを建設したり、仮設住宅地域での集会所を作り出すことも可能とする。



立面図 縮尺: 1:200

構造



構造は、秋田県産のスギを使用し、縦ログ構法を用いる。地産地消を行うことで、地域の仕事を有効に活用することができ、建築をつくる仕組みである。縦ログ構法とは、150×150mmのスギ角材を使用し、縦向きに並べて通しボルト、ビスで連結して、パネル化する。パネル化する事で、解体が容易となる。これにより、着の取り出しがしやすいので、ユニットの連結、分解の簡易化を図る。壁であるログパネルは構造材、断熱材、仕上り材と併用して機能する。製材からパネル化するのに、特殊な加工・製造機器を用いないことから、地方の小規模の製材所で製造できる。

通常、秋田県内に建っている複合施設として地域の人々に利用される。また、自然災害はどこで起こるかかわらなく、いつ起こるかかわらない。しかし、移動式コンテナ型仮設住宅は、一般的な住宅と断熱性能に大きな差はないため、寒さの厳しい冬でも過すことができる。

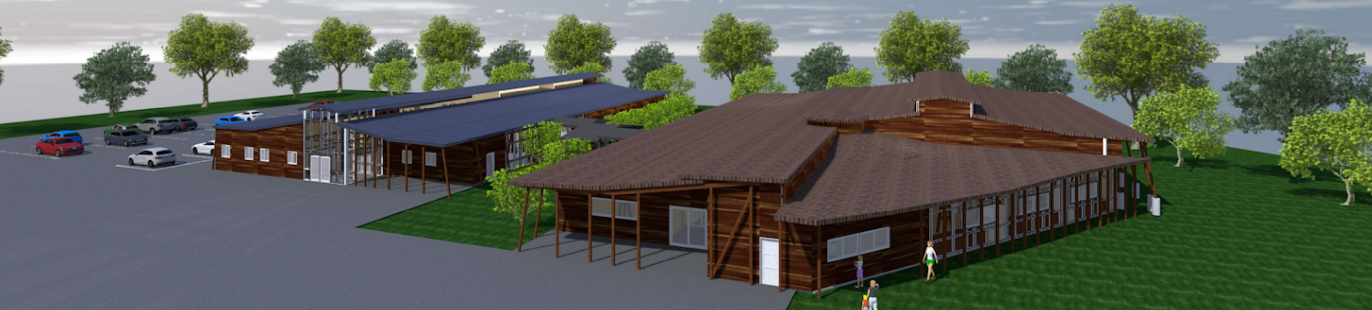
従来のプレハブ式仮設住宅とは異なるつくりで、住宅を工場生産するよう形をつくる。基礎を構築した上にのせることにより、電気設備、給排水設備を設置すると組み始めることができるため、1から作るよりも時間が短縮できる。基礎は、コンクリートブロックによる独立基礎を採用することにより、より簡易的に建てられるようにする。



ブロック基礎

由利ほっと ～温泉のあるまち～

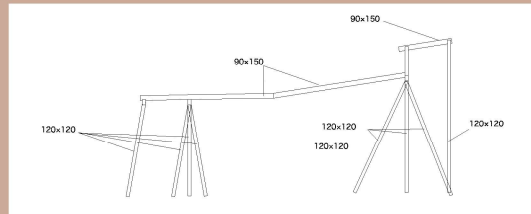
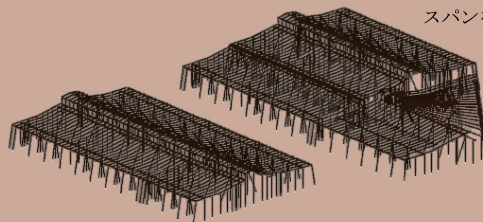
【コンセプト】
 私たち学生のみならず、一般の方がほっとくつろげる場所を提供できないかと考え、温泉とカフェと岩盤浴を融合させた木造施設を設計した。由利本荘市には鶴舞温泉や安楽温泉等、温泉施設が既に存在しているため、温泉街のような街並みを目指したいと考えた。歩いていくには少々遠いため、自転車の貸し出しを行い温泉のはしご旅が可能になってほしいと考えている。ここでは、仕事で疲れた社会人や、勉強の合間に一息つきたい学生や、温泉好き、岩盤浴好き、カフェ好きの老若男女まで、各個人、各グループそれぞれのニーズに応えられる施設を提案する。



休憩スペース内観

連続する線材で構造的な美しさを表現

登り梁ではなく、吊り梁にして継手を設けることで
 スパンを飛ばす大断面部材を使用せず、地域産材の小径木を活用



吊り梁構造概略図



カフェスペース内観

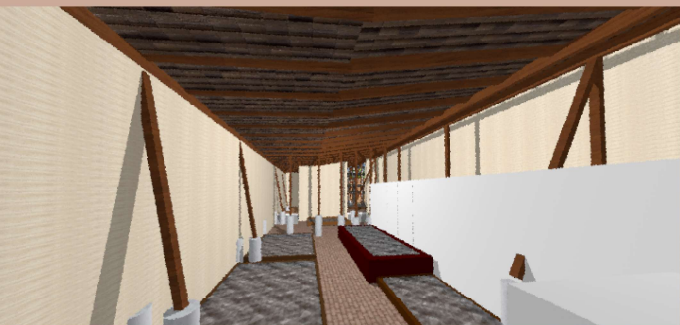
温泉 & 岩盤浴 & カフェ



3つの施設を兼ねたリラックスできる空間
 ほっと一息くつろぎの空間を提供



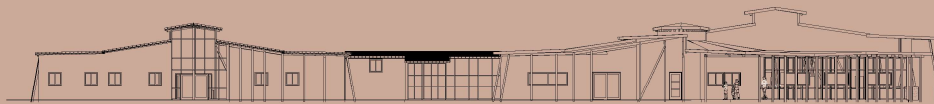
屋外カフェ外観



温泉内観



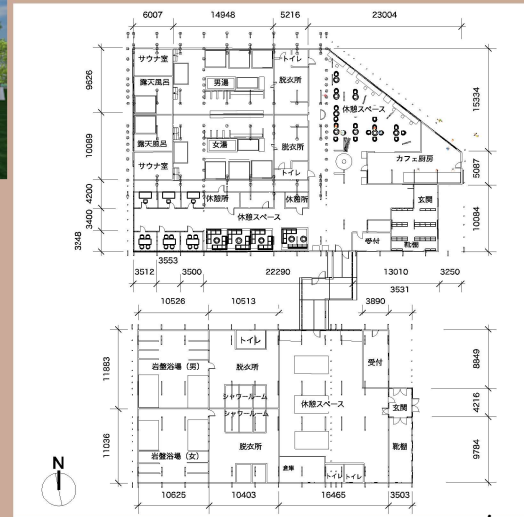
北側立面図 1:200



裏側立面図 1:200



配置図 1:1000



温泉兼岩盤浴施設平面図 1:400

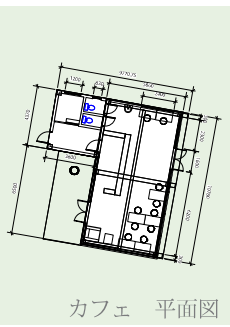
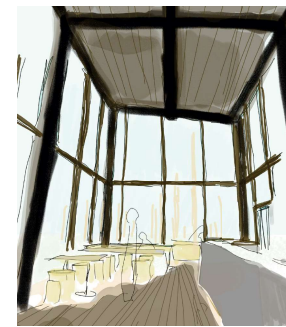
布と風花

風で布がたなびき、木影と人影が重なる
 コーヒーを片手に雪を踏み分け、人と出会う、
 交流する
 カフェやオープンスペースは木の温かみを感じ、
 人が滞留する

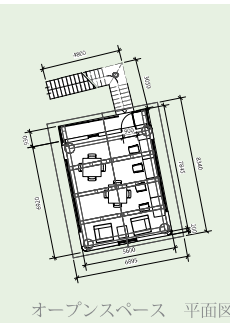
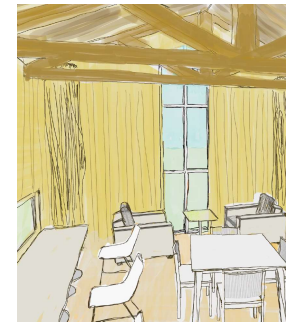
どこからでも入れてどこにでも逃げられる
 ポーラスな空間 森のコテージ

木の柱は広い空間、狭い空間を生み出し
 流動的なスペースの変化を可能にさせます。

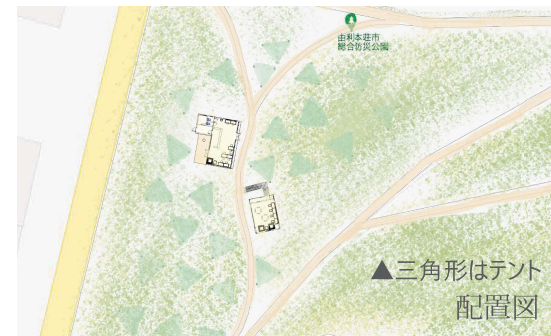
可視化する風、可視化する場
 可視化するところ



カフェ 平面図



オープンスペース 平面図



▲三角形はテント
配置図



カフェ 断面図



オープンスペース 断面図

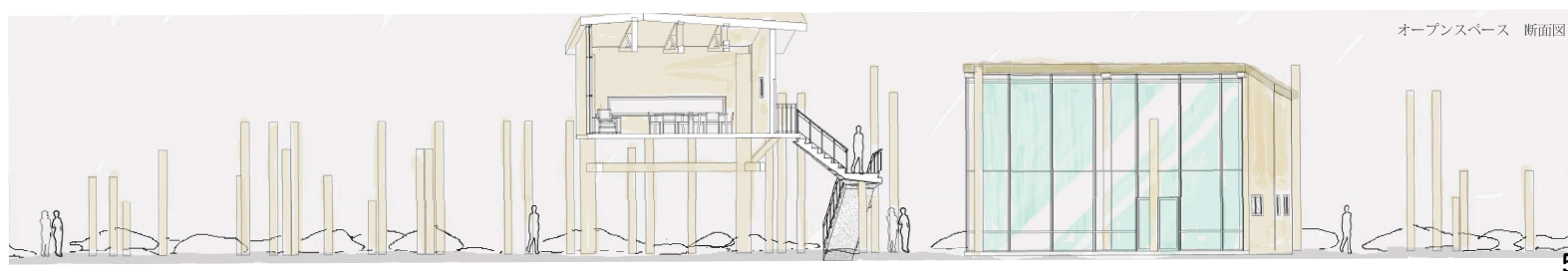


敷地の特長



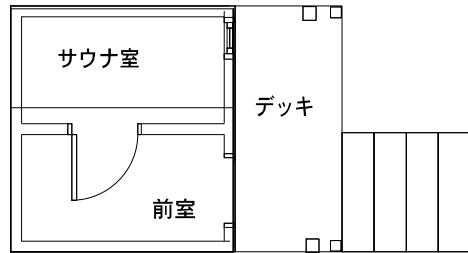
ナイスアリーナは国際試合も行われる
 大きな体育館を有する場となっています
 フィットネスジムなど屋内の運動施設が充実しているため
 冬の間、運動できる貴重な場所となっています。
 また酒田街道に面しているため
 仕事帰りの人や外食をしに来た人など多くの人の目に止まる
 場所となっています。
 隣接して広い公園があるため、放課後遊びにくる学生や散
 歩やランニングをしに来る人が多く見られます。

由利本荘市の気候の問題として冬の間、雪や風が強い特長を持っています。
 冬の間でも気軽にイベントを企画、参加でき、運動不足を解消できる空間にしたいと思いました。
 人を集め、雪や風を受け入れられる空間を考えた結果、このような計画となりました。
 オープンスペースからは隣の広場を覗けるため、子供と遊びに来た親の休憩所になります。
イベント時には3本の柱に三角形の布でテントを張ります。
 カラフルな布を使ったり、シンプルな白の布を使うことによりイベントの特長ごとで使い分け
 ことができます。遠くから見ても何かやっていることが分かることにより
 人の関心がこのスペースに集まるのではないかと思います。



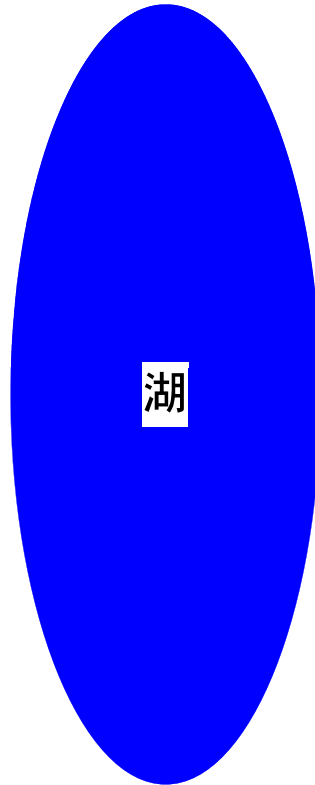
秋田の自然を楽しむ屋外サウナ

秋田にあふれた自然をもっと利用したいという思いから、自然のなかにアウトドアサウナを設置したいと考えました。
日本の3大美林のひとつである秋田スギを材料としその独特な香りと色沢を楽しめます。
屋外とサウナ室の間には前室があり極寒の中でもリラックス。
水風呂には田沢湖を利用し、日光が入り込むほどの透明度の水風呂を楽しめます。
寒い地域である秋田ならではの楽しみ方ができると思います



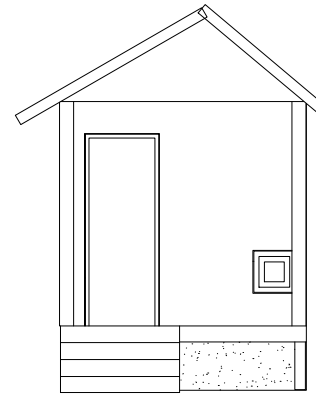
1 [図面タイトル]
縮尺: 1:50

デッキチェア

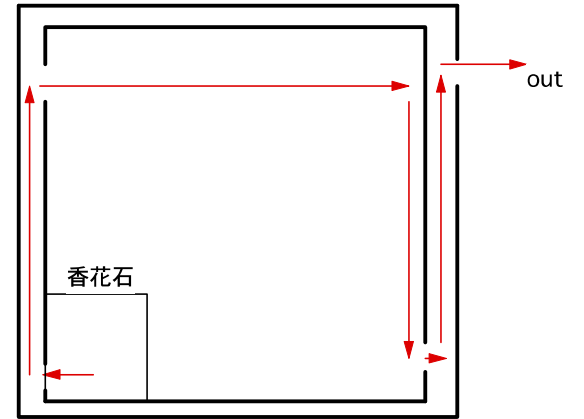


木材の腐食を避けるため地面と床の間にコンクリートを敷いています。

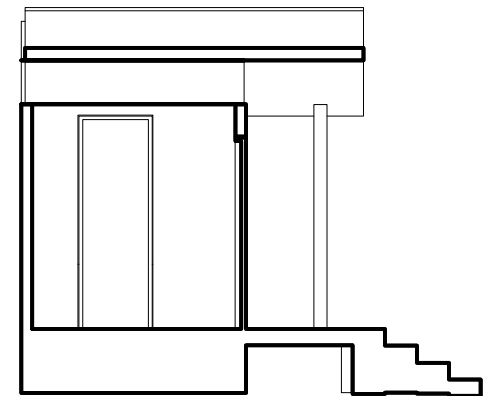
5 パース
縮尺: 1:20



3 立面図
縮尺: 1:50



香花石によるストーブから、加熱された空気が二重壁のスペースを上昇することで壁の上部から排気され、サウナ室内の湿度は均一化されます



4 断面図
縮尺: 1:50

木廊

もくろう

丘を駆け抜ける『木の廊下』



課題

秋田県立大学本荘キャンパスの北西には広大で起伏のある芝生の丘がある。しかし3年半の通学においてこの丘を利用している人を見たことがなかった。早朝や夕方に犬の散歩で利用している人を見かけたことはあるが学生や教職などの大学利用者が日常的には利用していない。

また、駐車場の西側から大学内に入る際、起伏のある丘を通るが、迂回しなければならない。

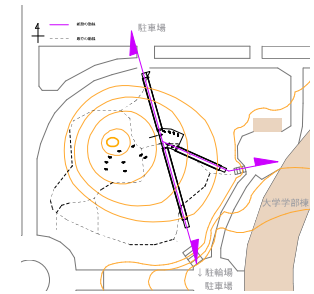
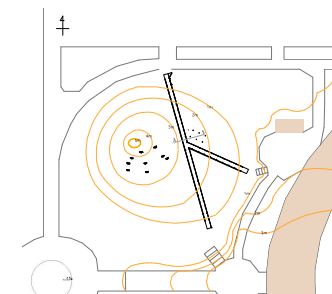
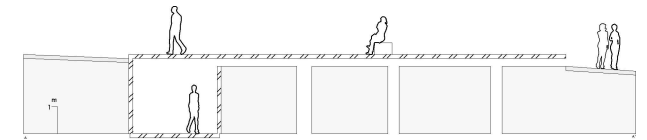
景色としか認知されていない広大な敷地を、目的的に使われるような丘にし、かつ通路として利用されるためのぎっかけを「木」によって生み出そうとした。

歩く

既存の道は高低差が激しいために通路として利用されなかった。そこで丘としての機能と通路としての機能が生きるように丘の内部に通路を落とし込んだ。

これにより高低差がなくなり、さらに直線的に結ぶことで最短の動線を確保した。また、中に落とし込んでいるので、通路の上(通路中央部分)を歩くことができ丘の頂上までの動線も同時に確保した。

通路と、キャンパスの廊下の高さ・幅を揃えることでキャンパスと丘に連続性を持たせた。キャンパスとのゆるやかな繋がりを歩くことができる木の廊下『木廊』である。



座る

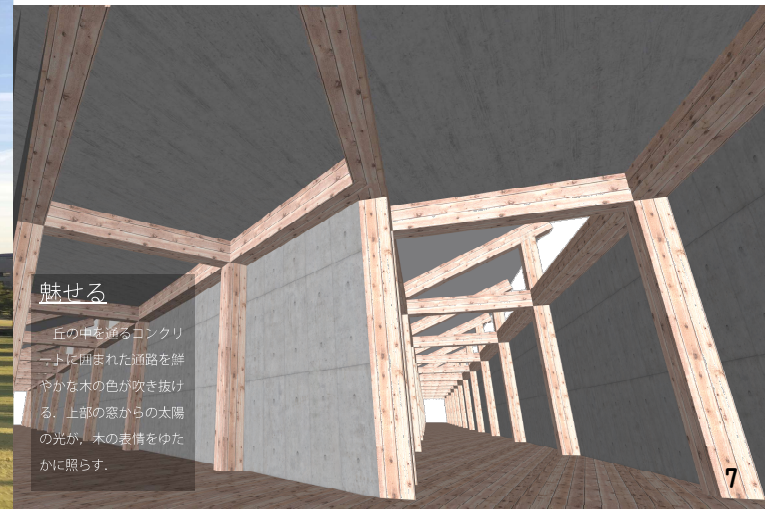
キャンパス内で秋田・本荘のシンボルである鳥海山をゆっくり見ることができる場所は限られるので、南を向くベンチは鳥海山を望むことができるように設置した。

丘に留まるきっかけを、「座る」という行為によって生み出すためのベンチである。



魅せる

丘の中を通るコンクリートに囲まれた通路を鮮やかな木の色が吹き抜ける。上部の窓からの太陽の光が、木の表情をゆたかに照らす。



Sea House

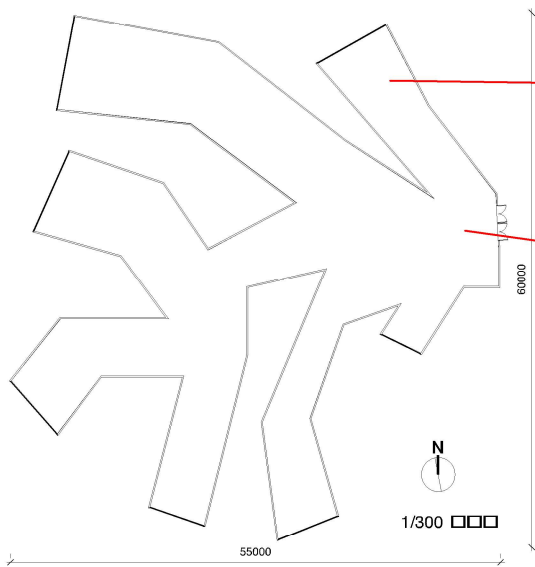
海を一望できる解放的な空間で
老若男女、学生、社会人など
多種多様な人々の憩いの場であり、繋がる場

～外観のコンセプト～

居心地の良さ、建物に対する親しみ易さを感じてもらうため、木材を用いた建物にしました。その中で様々な人が集まる場所と言うメッセージ性を、外壁に用いる木材を様々な種類にすることで表現しました。建物全体の形については、一つの木をイメージしたものとなっています。この特徴的な点として、周辺の景色を一望できる大きな窓が設けられており、これによって、自然と一体化した空間を作り、解放的かつリラックスできるようにしています。



建物の配置に関しては、秋田県沿岸部の見晴らしの良い平坦な場所に建てる想定です。



建物の内部は壁に仕切られていないため非常に解放的ですが、それによって落ち着かない空間にならないよう、外壁を屈折させ、視線がある程度切れるようにしました。また、内部を枝分かれ状にしたことにも理由があり、この建物には、人と話す人、勉強する人、本を読む人など様々な過ごし方をしてもらうため、その用途ごとに別れるようにするゾーニングとしての役割があります。



□この建物には年中訪れる事ができる海の家としての役割もあるため、海の家同様飲食ができるよう、施設内にお店も入れたいと思います。また、県外の人にも来てもらうために、観光土産店のような施設も設けたいと考えています。



憩いとたわむれ ~大学前公園アソビバ計画~

大学前にある飛鳥公園。その多目的広場はゲートボールで利用する年配の方々がいるが、ベンチや屋内の施設がないため、車や芝生で休んでいた。そこで、多目的広場を使う人が集まる・休む場所を提供したいと思った。また、利用者の拡大を図るため、子供が集まって遊べる場所としても利用できる建物を目指した。木材の加工のしやすさや木のもたらす安心感に目を付け、様々な工夫を凝らした。



外観
縮尺: 1:500

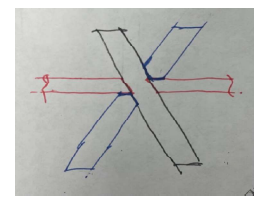


平面図
縮尺: 1:200

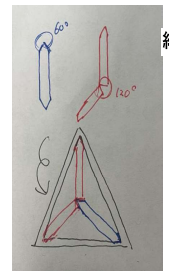
東側立面図
縮尺: 1:200

北側立面図
縮尺: 1:200

フェンスや間仕切り壁は本荘の組小細工をイメージし、同じ接合方法で作った物である。階段の下にはキッズスペースを配置。

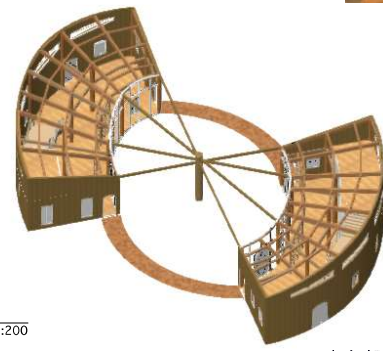


組子の接合イメージ



内観
縮尺: 1:1000

構造は木造である。屋根にかかる梁が青森県むつ市にある吉野保育園の構造を参考にした。



梁
縮尺: 1:200



配置図
縮尺: 1:1000

大学方面

多目的広場を東西にダイレクトに移動できるよう、配置図のような楕円形の構造にした。中心の円錐のようなオブジェクトは遊具となっている。また、楕円形の敷地に沿ってぐるぐる走り回れるコースを整備しており、子供が走り回り大人もそこを歩くことが出来るよう設計している。



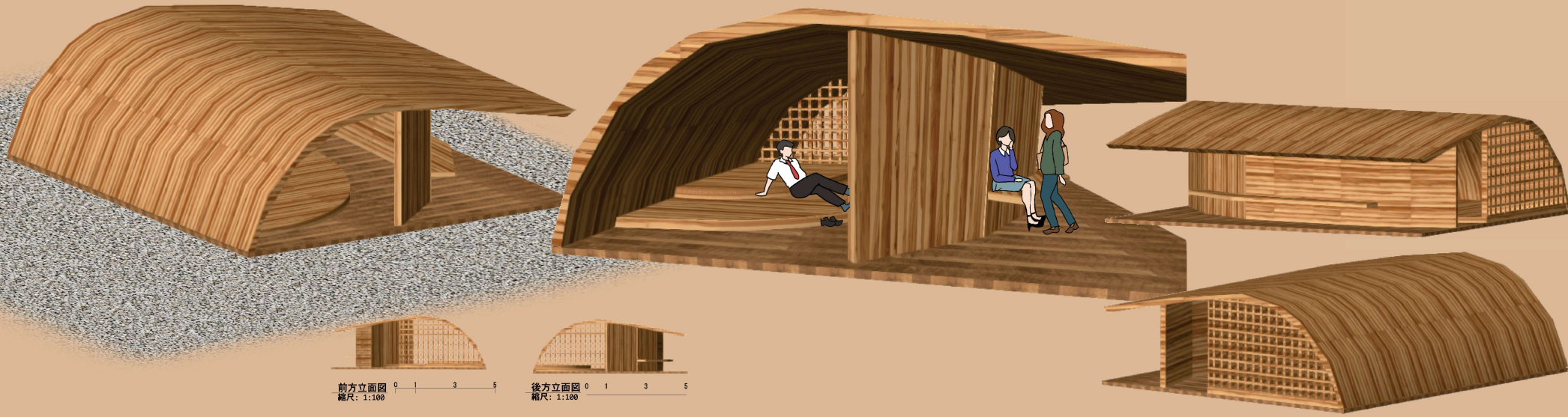
遊具
縮尺: 1:1000

中心部の遊具はボルダリングのような突起物を付けており、つかんで登ることが出来るようになっている。この突起物や遊具の足場などは木材加工所で出た端材などを使用し、木材のロスを減らす目的もある。

木「で」触れ合うあたたか空間

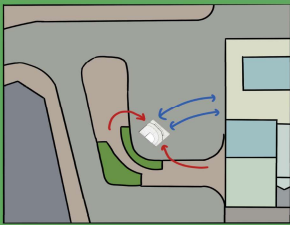
Concept

今回の木材提案コンクールを構想するにあたって一番重要視するべきなのは、木材特有の柔らかさと温かみだと考えた。コンクリートや鉄骨にはない木材唯一無二の特性を活かすべく、利用者の肌に直接触れるような形にしたいと思い今回のような見て触れて楽しめるようなオブジェクトを提案した。



Location

由利本荘駅前の広場を選択した。平日頃から感じている駅前なのに閑散としている雰囲気や印象の暗さを今回の提案で少しでも払拭したいと考えている。電車の待ち時間や会社や学校から帰ってきた時、そこでゆっくり時間を過ごしたり疲れた体を木の温かみで癒してほしいという願いも込めている。



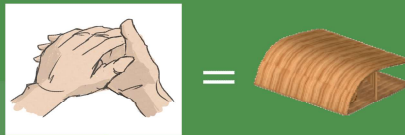
配置図
本荘駅前の広場の簡略図（上が北、右が東）
現在整備されている歩行者通路からスムーズに、外部のベンチと駅側からお互いの姿が見られるように配置した。最近新しく改築された駅の景観も生かしたいと思い、この配置とした。



配置する前と配置後の様子

Diagram

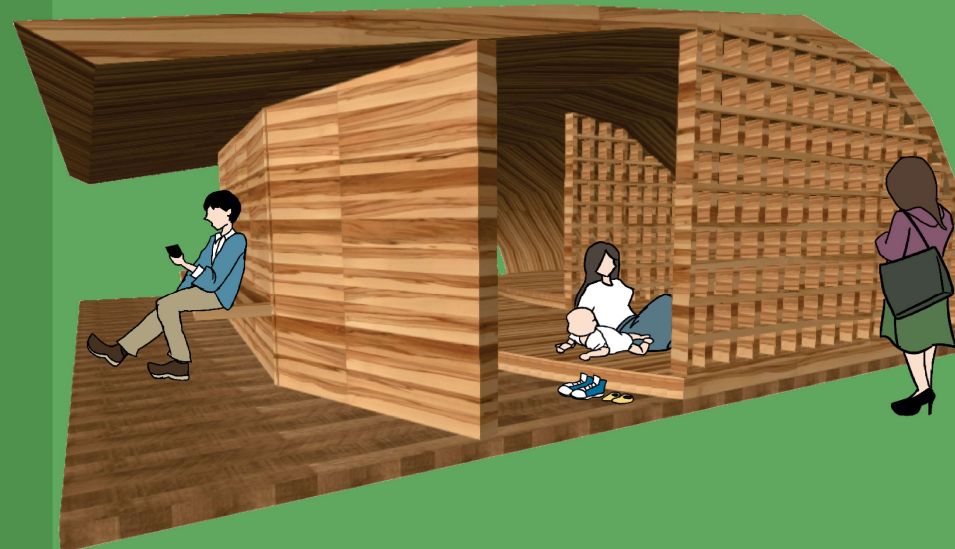
木の温かみや香りによるリラックス効果をより感じて貰うために優しく手で包まれる様子をイメージした。覆う手のシルエットは柔らかな女性を連想させる曲線を用い、囲う手の方は力強い男性を表す直線を用いた。



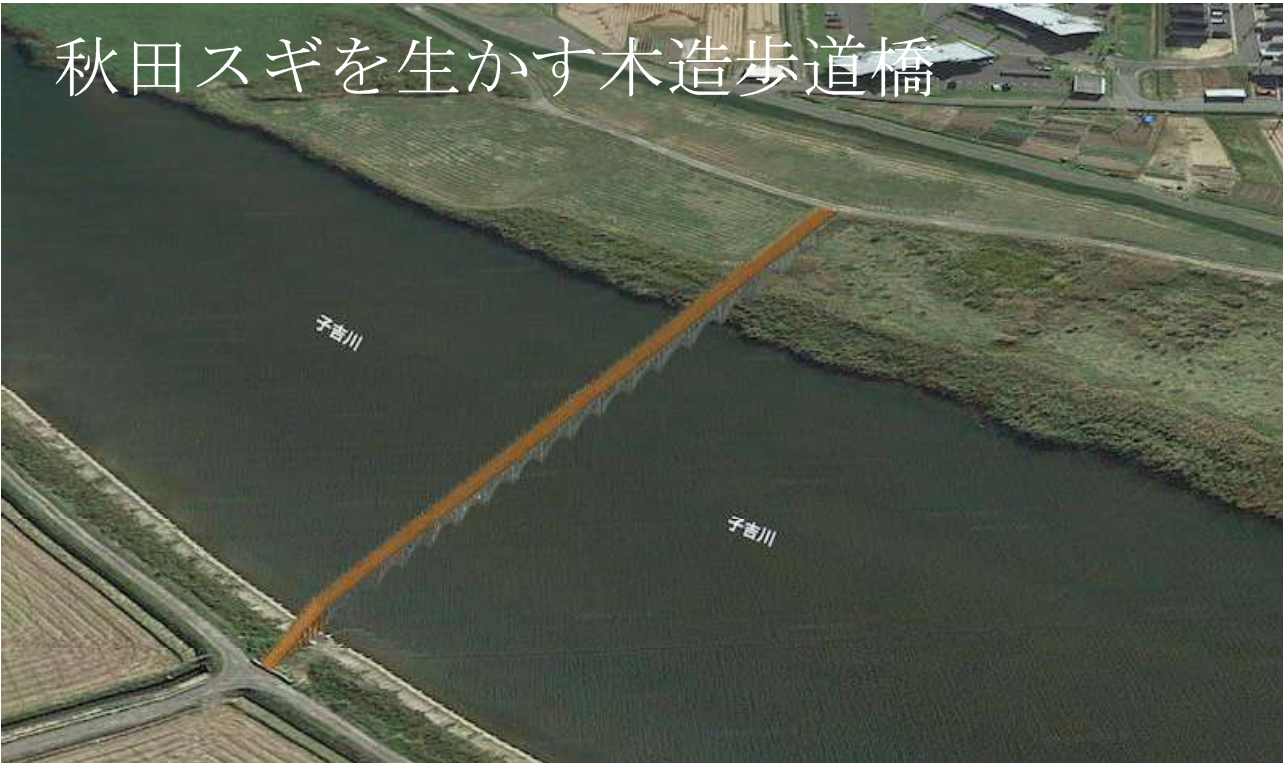
オブジェクトの空間を仕切る壁部には組み木を用いた装飾、外部には曲げわっぱを用いることで視覚的にも木材の良さを味わってもらえるように工夫を凝らした。木材には勿論秋田県産のものを用いて、秋田県内の林業も盛り上げたいと考えている。

Program

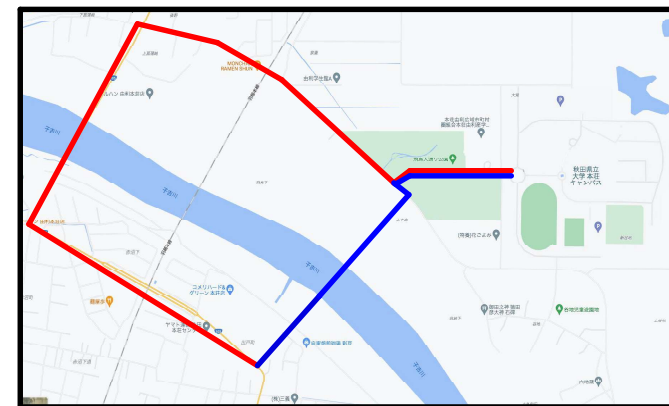
曲線を表現するために秋田県特有の曲げわっぱを用いることで、駅前広場のランドマークとなるようなファザードを実現するとともに、その傾斜が降雨時や積雪時に活きる。内部は床面を2段階設けることで高低差を出した。靴を脱いで利用してもらうことでより木の温かみを感じることができる。外部にも屋根の下にベンチを設置することで気軽に利用してもらえるように配慮した。



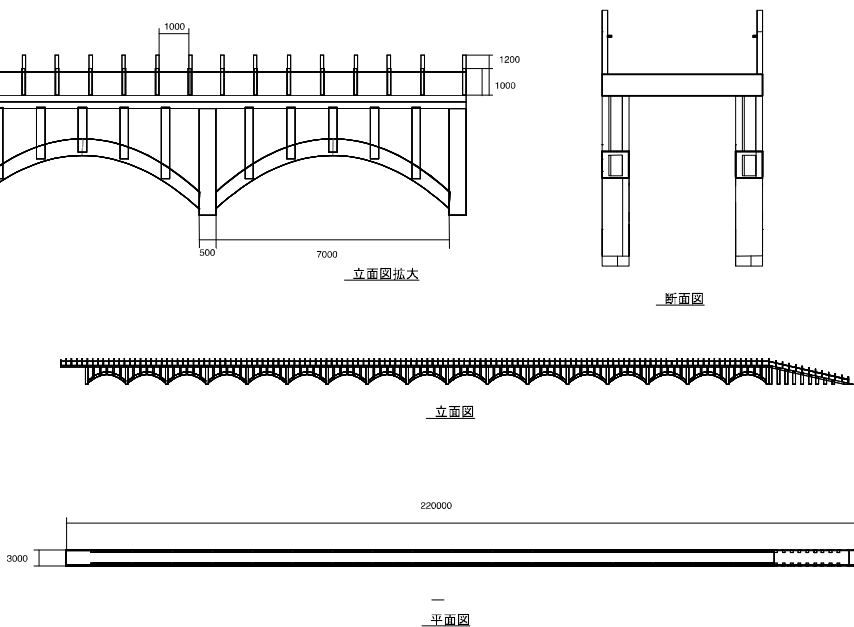
秋田スギを生かす木造歩道橋



配置図



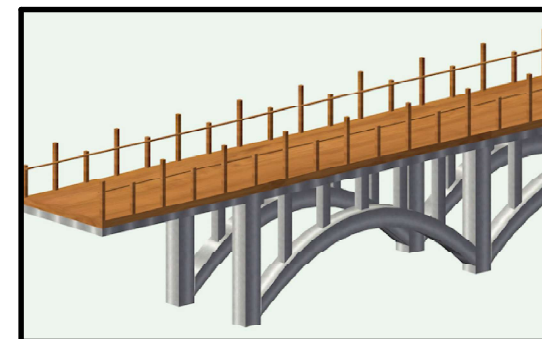
青い線状の川に橋をかける。橋がかかる前の赤い線のルートだと大学まで30はかかる。しかし橋をかけた後のルートを利用すると約10分で大学まで行くことができるようになるだろう。



Concept

私は秋田県由利本荘市に住み始めてもう少しで三年経ちます。現在移動手段として車を持ちましたが大学一年生のときは自転車で大学へ通っていました。もちろん冬は雪で自転車に乗れないので徒歩で通学していました。大学に行くためには飛鳥大橋を渡って30分かかりました。そしていつも遠回りだなと感じていました。地図で上から見ると大学までの道は1つしかなくもう1つ羽後本荘駅近くに橋があればすごく便利だと思い、今回の作品に繋がりました。

Diagram



手摺

歩道橋の両サイドの手すりの柱は互い違いに大きさを覚えて高低差をだしスギの森をイメージした。周りの景色には高い建物がないので景色を楽しむためをして景観の邪魔にならないように手すりの柱は最大120cmとした。